

特別支援学校学習指導要領における「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した生活単元学習の授業づくり

戸谷 健史 高度教職開発コース

キーワード：各教科等を合わせた指導，伸びている力，教科別実態把握シート，学習評価

1. はじめに

特別支援学校（知的障害）では、子どもの願いや興味・関心を軸にしながら、子どもが実際の生活の中で主体的に学ぶことを大切にして、各教科等を合わせた指導（以下、合わせた指導）の指導形態の一つである生活単元学習の実践を重ねてきた。

そのなかで、子どもの実態の多様さから、学習活動を成立させるに留まり、学習活動を通して子どもが何を身に付けるのか（身に付けたのか）といった、学習活動と各教科等の学習内容の関係性が不明確になっていることが指摘されている（丹野 2017，田淵ら 2020）。そのため、子どもの伸びている力に適時性をもって応えることが難しい現状がある。

背景として、①各教科等の学習内容を捉える根拠が曖昧であるため、教師が各教科等の視点から子どもの発達を捉えにくい、②生活単元学習が各教科等に分けられる以前の未分化で総合的な生活活動を内容としている（名古屋，2019）ため、教師が生活単元学習を支えている各教科等の学習内容を捉えにくいといったことに原因があると考えた。

そこで、特別支援学校学習指導要領の「各教科等の目標及び内容」に着目した。理由は、改訂に伴い、小・中学校の各教科等とのつながりを意識した内容への充実が図られたことにより、①教師が子どもの発達を各教科等の視点から継次的かつ総合的に捉えられるようになり、②教師が子ども一人ひとりの各教科等の力の育成と学習評価を想定して生活単元学習の授業づくりを行うことにつながるため、子どもの伸びている力に適時性をもって応えていけるのではないかと考えたからである。

以上のことから本研究では、実態把握、計画、実施、学習評価といった授業づくりの一連の過程において、「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した実践を重ねることにより、教師が学習活動と各教科等の学習内容の関連性を明確にしながら生活単元学習の授業づくりを行う際の要点を明らかにする。

2. 研究1 「各教科等の目標及び内容」に基づいた教科別実態把握シートの開発

2.1 目的

個々の発達に違いのある子どもの伸びている力を捉えていけるように、教科別実態把握シートを作成し、(1)「各教科等の目標及び内容」の視点をを用いて発達の状況を明らかにする、(2)教師が教科別実態把握シートにチェックをつける際の要点を導き出す。

2. 2 方法

中学部 2 年生 K 生を対象とした。「各教科等の目標及び内容」を基に小・中学部の段階および資質・能力から構成される教科別実態把握シートを作成した。学級担任間で K 生の具体的な姿と「各教科等の目標及び内容」の記載事項を照らし合わせてチェックを付け、結果から発達の特徴を捉えた。

2. 3 結果と考察

(1) K 生の発達状況

発達の特徴として、K 生は知識及び技能として身につけていることが多いため、適切な手立てを用いることにより、思考力、判断力、表現力等についても、さらなる育ちが期待できるのではないかといったことが明らかになった(表 1)。

(2) 教科別実態把握シートにチェックをつける際の要点

子どもの伸びている力をより正確に把握するために、「できる」「できない」の二元論ではなく、「培われている力」と「手立てがあるとできる力(伸びている力)」の二つで捉えることが、次に目標とする学習内容の選定に有効であることが分かった。

2. 4 教科別実態把握シートを用いることの利点

教師が子どもの伸びている力を明確に(教科別, 段階別, 内容別)捉えることにつながる。そのため, 子どもの伸びている力に適時性をもった授業づくりを展開していけると考える。

表 1 チェックをつけた後の教科別実態把握シート(国語, 抜粋)

		小学部			中学部	
		1 段階	2 段階	3 段階	1 段階	2 段階
知識及び技能	ア	(ア)	(ア)	(ア)	(ア)	(ア)
		(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
		(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)
		(エ)	(エ)	(エ)	(エ)	(エ)
		(オ)	(オ)	(オ)	(オ)	(オ)
	イ	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
		(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)
		(エ)	(エ)	(エ)	(エ)	(エ)
		(オ)	(オ)	(オ)	(オ)	(オ)
		(カ)	(カ)	(カ)	(カ)	(カ)
思考力, 判断力, 表現力等	ア	(ア)	(ア)	(ア)	(ア)	(ア)
		(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
		(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)
		(エ)	(エ)	(エ)	(エ)	(エ)
		(オ)	(オ)	(オ)	(オ)	(オ)
	イ	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)	(イ)
		(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)	(ウ)
		(エ)	(エ)	(エ)	(エ)	(エ)
		(オ)	(オ)	(オ)	(オ)	(オ)
		(カ)	(カ)	(カ)	(カ)	(カ)

…「手立てがあるとできる(伸びている)力」
 …「培われている力」

3. 研究 2 学習活動と各教科等の学習内容の関連性を明確にした授業づくりの実際

3. 1 目的

K 生の伸びている力を踏まえて、「各教科等の目標及び内容」の視点を用いた実践を重ね、学習活動と各教科等の学習内容の関連性を明確にした授業づくりの要点を明らかにする。

3. 2 方法

(1) 対象生と単元: 対象生は研究 1 と同様 K 生とした。中学部生活単元学習「みんなで『あさひの運動広場』をつくって楽しもう (K 生

の主な活動はクライミングボードの制作)」

(20XX+1 年 9 月～11 月, 全 48 時間) で実施した。

(2) 授業づくりの過程: これまでの実践(表 2) から生成された「授業づくりの過程(図 1)」を基に, 次の手順で授業づくりを実施した。①学習活動と学習内容の整理, ②主に育成をねらう各教科等の計画, ③具体的な学習内容(ねらい)の設定, ④手立ての策定と実施, ⑤学習評価(図 1)。

表 2 これまでに行った実践

時期	単元名
1 20XX年 9月	「あさひの祭りをひらいて楽しもう」
2 20XX年 11月	「あさひの笑顔広場でダンスやゲームをして盛り上がる」
3 20XX+1 年 2月	「中 B 桃太郎を作って楽しもう」
4 20XX+1 年 7月	「中学部みんなであさひのテラスを作ろう」

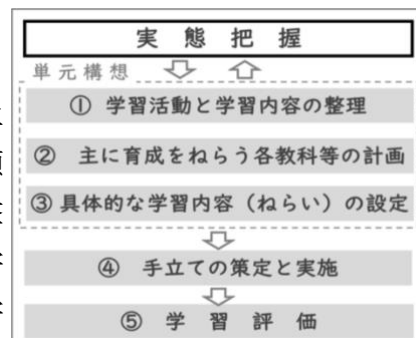


図 1 生成した「授業づくりの過程」

3. 3 結果と考察

(1) K 生の本単元における願いと単元目標

この時期の K 生の興味・関心、本単元における願い（自分もみんなもゴールまで登れるクライミングボードを作りたい）を捉え、単元目標を「教師や友達の思いや考えを受け止め、自分の考えを加えながら、クライミングボードの制作に取り組む」とした。

(2) 授業づくりの要点

表3 本単元における学習活動と学習内容の対応

学習活動	学習内容
クライミングボードのホールドを制作する	数 学、職 業・家 庭
クライミングボード班の教師や友達の意見を聞きながら、自分の制作するホールドの形や配置を考える	国 語、社 会、体 育
学習カードを用いて計画的に活動を進める	国 語、美 術

① 学習活動と学習内容の整理

K 生の願いや単元目標を受け、具体的な学習活動を計画し、「各教科等の目標及び内容」と照らし合わせることにより、各教科等の学習内容との関連性が整理された（表 3）。結果、教師が単元に含まれる各教科等の学習内容を明確にすることにつながった。

② 主に育成をねらう各教科等の計画

表4 主に育成をねらう各教科等と伸びている力

	手立てがあるときできる力（伸びている力）
国語科	中学部 2段階 聞くこと 話すこと ウ
数学科	中学部 2段階 B 図形 ウ(ア)ウ、(イ)ア
保健体育科	中学部 2段階 体づくり運動 イ

①で整理した学習内容と K 生の興味・関心、本単元における願いなどから関連の深いものを焦点化した。結果、主に育成をねらう各教科等の見通しが立った。また、教科別実態把握シートを参照することにより、主に育成をねらう各教科等に対応した「手立てがあるときできる力（伸びている力）」を具体的に捉えることにつながった（表 4）。

③ 具体的な学習内容の設定

表5 具体的な学習内容と策定・実施した主な手立て

	具体的な学習内容（何を身につけるのか）	手立て
国語科	制作したいホールドの形と配置に関して、自分の意見やその理由について、内容の大体が伝わるように伝える順序や伝え方を考えながら表現する。 (中学部2段階 聞くこと 話すことウと対応)	ホールドの形や位置について分かってきたことの視覚化
数学科	ホールドの持ち手の部分を制作するときに、角の大きさを測定したり、角の大きさとかみやすさの関係を的確に捉えて表現したりする。 (中学部2段階 B 図形 ウ(ア)ウ、(イ)アと対応)	分度器、様々な角度見本、角度のとりやすい補助具
保健体育科	自分や班のみんながゴールまで登れるように、自分や班の課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりしたことを他者に伝える。 (中学部2段階 体づくり運動イと対応)	授業展開の工夫 ①ホールドの形や配置を考える ②ホールドを制作する ③仮留め、試しに登る ④話し合う⑤コースの修正

②で捉えた段階・内容が本単元を通して育成されるよう学習活動に即した内容へ置き換えた。結果、「各教科等の目標及び内容」に対応した K 生の具体的な学習内容を設定することにつながった（表 5 左欄）。

④ 手立ての策定と実施

教科別実態把握シート、個別の指導計画を参照しながら、設定した具体的な学習内容に対応した手立てを策定・実施した。結果、学習内容の深まりを促進する手立てが明確になり、学習状況に応じて質や量を見返しながら実施することにつながった（表 5 右欄）。

⑤ 学習評価

K 生の伸びている力に適時性をもって応えられていたのか、本単元を通してあらわれた姿と設定した具体的な学習内容の対応を捉えた。

国語科：「簡単だけど少し難しいコース」というテーマで制作をしたとき、K 生はこれまでの制作で分かってきたことを一覧にした掲示を見ながら、「私はつかみやすいホールドを制作して、T 先生のつかみにくいホールドのすぐ上に置こうかな。そうすれば、昨日のように簡単だけれど少し難しくなりそう」と、自分の意見やその理由について、伝える順序

や伝え方を考えながら表現するようになった。

数学科：ホールドを制作する場面で、K 生が、「前よりもつかみやすくしたいから（角度を）この位にしたい」と指先を少し広げて手で三角形を作った。教師が、「前は 45° でしたね。今日は何度の位の角度にしますか」と尋ねながら様々な角度見本を示すと、K 生は、「 60° がよい」と伝えた。そして、分度器で 60° を測る、木材にけがき線を書く、木材を切るなどした。木材を切り終わると、つかみ心地を確かめ、教師にホールドを見せながら、「見て、 60° にして前よりもつかみやすくなったよ」と笑顔で伝えるようになった。

保健体育科：制作したホールドを取り付け友達が試しに登っているときに、次のホールドをしばらく探ってから途中で降りる様子を見て、K 生は自分から、「このホールドをここに付け替えたらもっと登りやすくなると思うな。みんなはどうか」と友達の様子を踏まえて変更点を考えたり、考えたことを班の教師や友達に尋ねたりするようになった。

このように、設定した学習内容に基づき子どもの姿を捉えた結果、未分化で総合的な生活活動を内容としている生活単元学習においても根拠のある学習評価を実施することにつながった。さらに、これらの姿を総合すると、設定した単元目標とも対応することが明らかになった。



図2 考えを伝える K 生

4. 研究の成果と今後の課題

本研究では、「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した生活単元学習の授業づくりの要点を導き出した。結果、教師が子どもの伸びている力に適時性をもって応えることにつながるため、子どもが各教科等に関わる学習内容を自ら求め、身につけ、活用するといった自律的な学習態度の育成に結び付くことが明らかになった。

特別支援教育（知的障害）では、学習活動や学習内容の編成と実施の大部分が個々の教師に委ねられている。そのため、生活単元学習の授業づくりを行う際には、子どもの願い、興味・関心、主体性など自立と社会適応の視点を軸に置きながら、「各教科等の目標及び内容」の視点を道標として活用することにより、知的障害のある子どもの学びをより一層充実させていくことが求められているといえる。

文 献

名古屋恒彦(2019). 各教科等を合わせた指導の学習評価「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック. ジアース教育新社.

田淵健・佐々木全・東信之・名古屋恒彦・最上一郎(2020). 知的障害特別支援学校における「育成を目指す資質・能力」と「各教科等を合わせた指導」の関連. 岩手大学大学院教育学研究科研究年報第4巻, pp. 213-222.

丹野哲也(2017). 知的障害教育と育成を目指す資質・能力. 武富博文・松見和樹(編). 知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング. 東洋館出版社.

戸谷健史・奥村真衣子(2020). 「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した生活単元学習の授業づくり. 日本特殊教育学会第58回大会発表論文集, P3-68.